

なお、木簡の釈読にあたっては、原秀三郎・湯之上隆両氏のご教示を得た。

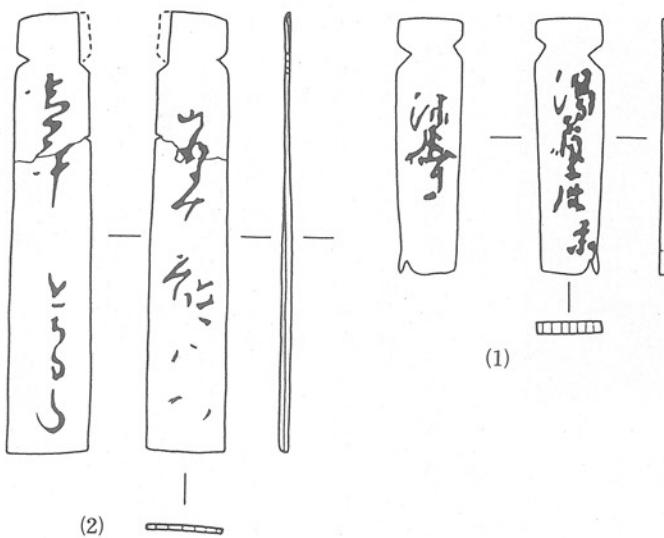
9 関係文献

静岡県教育委員会『駿府城三の丸跡・駿府城内遺跡』（一九九四年）

（佐藤正知）

静岡・駿府城跡

すんぶじょうあと



- | | |
|---------|---|
| 2 1 所在地 | 一 静岡市駿府町、二・三 静岡市駿府公園 |
| 調査期間 | 一 一九八七年（昭62）一月～一九八八年一〇月、二 一九九〇年（平2）五月～一九九一年五月、三 一九九二年七月～一九九三年二月 |

3 発掘機関 静岡市教育委員会

- 4 調査担当者 一 伊藤寿夫・岡村 渉、二 山本宏司・八木広尚・稻 智穂、三 山本宏司・岩田智穂

- 5 遺跡の種類 城館跡
6 遺跡の年代 中世～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（静岡）

駿府城跡は、安倍川によつて形成された扇状地（静岡平野）の中央を南に延びる微高地上に所在する。標高約二二mのこの微高地は比較的安定した場所であり、弥生時代中期から近世まで

の遺構・遺物が埋蔵されている。駿府城跡の調査は、一九九五年度までに二〇カ所ほど行なわれている。

一 駿府城跡三ノ丸（第六次調査）

この調査は市立中学校建設に伴う発掘調査であり、古墳時代後期、奈良時代～平安時代前期、平安時代後半、中世後半そして近世の生活面を検出している。木簡は、長さ一〇・五m幅六・〇m深さ二・二mの長方形を呈する大井戸状遺構から出土した。この遺構は底から湧水があり、その水面まで降りるための階段が設けられている。

覆土中からは、他に箸・漆塗椀・曲物・陶磁器・羽子板やキセル・銅錢などが出土している。調査地区は永井右近屋敷跡と考えられ、

遺構は湧水を利用するための施設と推測できる。

二 駿府城跡本丸・二ノ丸（一九九〇年度調査）

この調査は、現在、都市公園として利用されている駿府城跡の二ノ丸以内を、徳川家康構築による駿府城モチーフの公園に再整備する事業に伴い実施された。一九八八年度に復原された異櫓の本丸側に位置する。本丸堀南東角と二ノ丸米蔵跡の位置確認及び検出を目的に調査した結果、絵図どおりに本丸堀と米蔵跡が確認された。堀の石垣は高さ三～五m残っており、木簡はその底部から出土した。他に、陶磁器・瓦・鉄製品・建築材なども出土している。

三 駿府城跡本丸・二ノ丸（一九九二年度調査）

一九九〇年度調査に引き続きその北側にあたる、本丸堀、米蔵跡、

本丸堀と二ノ丸堀をつなぐ石積みの水路を発掘調査した。木簡が出土した水路は、本丸堀の水位を一定に保つような構造になつており、本丸堀接続部分から約五〇mにわたり石垣と同程度の石が敷かれていた。このような石敷き水路は全国的にも検出例がなく、非常に珍しい。水路からはこの他にも陶磁器・瓦・漆塗椀・箸・下駄・また焼けた刀・小柄とともに鉛塊（重さ一〇kg前後）が八個とそれを切断したもののが発見されている。

8 木簡の釈文・内容

一 駿府城跡三ノ丸

「元三年二月二十一日

和年二月二十一日

（刻書）

408×73×18 065

出土状況や乱れた刃の跡が残っていることなどから俎状木製品としているが、正確な用途については不明である。この前年、元和二年（一六一六）四月一七日に家康は没しているが、二月二〇日は家康が庇護援助した浅間神社の廿日会祭の日もある。



(1)

二 駿府城跡本丸・二ノ丸

- (2) • 「もちこめ ちんひやうへ」

・「三斗六升入 廿兵へ」

115×16×3 011

ともに出土した陶磁器類より一七世紀初め頃の物と推定できる。
当時の駿府における俵入は三斗六升であった。もち米一俵の荷に付けられた付札と考えられる。

三 駿府城本丸・二ノ丸

- (3) • 「▽下ノ御□□

式拾トカ
□

188×46×6 032

これも、ともに出土した陶磁器及び字体より近世初頭の物と考えられる。家康在城当時は堺と駿府との交易も盛んに行なわれており、堺からは白糸・香料や薬種などが駿府にもたらされていたと思われ、この木筒もそれらの荷に付けられた付札と考えられる。

9 関係文献

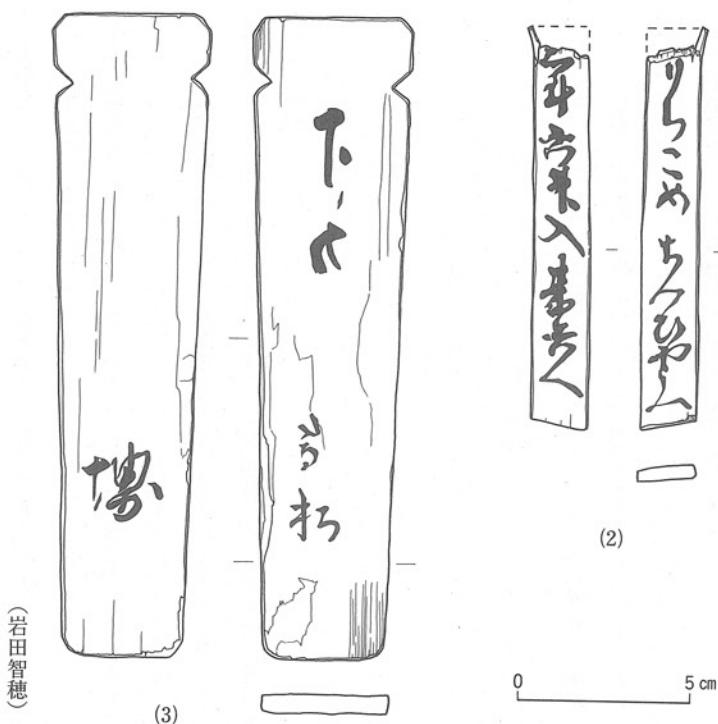
静岡市教育委員会『静岡市の埋蔵文化財—発掘調査の概要—』
(一九八九年)

伊藤寿夫・岡村涉「駿府城跡二ノ丸SXO-1出土の輸入磁器について—『元和三年二月二十日』刻銘木製品に伴う—」(『貿易陶磁研

究』一〇 一九九〇年)

静岡市教育委員会『静岡市の埋蔵文化財—発掘調査の概要—』
(一九九一年)

同『ふちゅーる—静岡市文化財年報—』一一(一九九四年)



(岩田智穂)